

中国の演劇と文学を 日本の視点も取り入れて 研究し、伝えていく

Navigator

文学部 / 中国言語文化専攻

飯塚 容

教授

Yutori lizuka



飯塚 容 (いづつか ゆとり)

1954年、北海道生まれ。

1973年、神奈川県立鎌倉高校卒業。1977年、東京都立大学人文学部文学科中国文学専攻卒業。

1982年、東京都立大学大学院人文学部研究科中国文学専攻博士課程修了と同時に、中央大学文学部専任講師。助教を経て、1996年から現職。

伝統劇に対抗して生まれた 日・中の新たな演劇の流れ

時代は中国で清朝が倒れ、アジア史上初の共和制国家・中華民国が誕生する20世紀初頭。飯塚先生の研究テーマの一つが、当時生まれた中国現代演劇の源流とも言える「文明戯」と日本演劇の関係だ。

「文明戯」とは、西洋から入った近代的な事象のことで、『文明戯』は、京劇など中国の伝統劇に対する新劇（西洋の近代演劇に影響を受けた新しい演劇）を指します。日本も明治の末、歌舞伎などの伝統芸能と西洋の近代劇が並立する状況になりましたが、日本と中国が同じく西洋の演劇を受け入れ自国の演劇文化を豊かにする経緯が面白い。また、『文明戯』を始めたのが、日本に来ていた中国人留学生というのも興味深いです」

当時の日本は「大正デモクラシー」といわれる、民主主義・社会主義運動や女性解放運動などの社会運動が始まろうとする時代だった。アジアのなかでは一歩先に西洋化を果たしたその日本で西洋の学問を学ぶために、日清戦争で日本に敗れた中国の留学生が大挙して押し寄せていた。「当時の日本の演劇は歌舞伎から新劇に移る過程で『新派』が全盛でした。新派には歌舞伎と同じく女形があり、やはり伝統劇に女形がある中国人留学生にとっても受け入れやすい形式だったと思います。その後、中国では西洋の近代劇を取り入れた

話し言葉だけの本当の新劇として『話劇』が登場していきます。

新派劇と文明戯には、女形以外にも共通点が存在します。新派は『書生（学問を学ぶ若者）芝居』から生まれたので、自由民権運動（国民の自由と権利を求めた明治時代の政治活動）と結びついていて、政治改革の運動と演劇が関連していました。中国も全く同じで、当初は辛亥革命の影響を受けた革命にまつわる演目が多いのです。その後、新派は男女の恋愛を中心に、継子いじめや嫁姑問題など家庭内の悲喜劇を盛り込んだ通俗的な内容に変わりますが、中国も中華民国の誕生後は男女の物語が増えていきます」

日中の演劇がほぼ同じ経過をたどって変化していく歴史がとても興味深い。中国の演劇はその後も政治体制に応じてさらに変化したという。

日中の演劇交流を支えた 演劇人たち

飯塚先生は、明治・大正期の日中演劇交流を論じた『中国の「新劇」と日本』をまさに出版したところ。しかし両国の演劇交流は、その後もずっと続いた。

「私は、1930年〜40年代に活躍した中国を代表する劇作家・曹禺（そう・ぐう）の作品を卒論で取り上げたのですが、37年に始まる日中戦争の直前も交流は続いていました。曹禺の34年の処女作『雷雨』は翌年に東京で中国人留学生によって上演

されているのです。当時間も留学生は多く来日していました」

先生によると、この時代には日中の人的交流も密接だった。

「実は中国人留学生に『雷雨』の上演を薦めたのは、日本人の中国文学研究者だったのです。また、この舞台を観た東大の日本人学生がとても感激して、出演していた中国人留学生と共に日本語訳して出版しています。劇作家の秋田雨雀がこれを支援したといわれますが、戦後も活躍した村山知義や千田是也なども留学生への援助を行っています」

こうした交流の背景に先生は「進歩的・左翼的な演劇人の特性」を挙げる。30年代は全世界で左翼的なプロレタリア演劇運動が盛んで、中国人留学生との間に互いに共感できる思想があったのだ。

「演劇を通じた日中間の交流は、国



西洋と東洋の出会いと融合。そこから生まれる中国独自の文化が、飯塚先生ならではの視点で、さらに輝きを放つ。

交が途絶えた戦後も続いて、日本の新劇の訪中団が中国で公演するなど、非公式な交流が行われました。72年の国交正常化を経て、80年以降は中国の劇団の来日も盛んになりました」脈々と続いた交流は、現在の外交関係から見ても特別な出来事だ。先生は「20世紀の日中演劇交流は戦前・戦後を通じて現在に至るまで、様々な局面を経てきました。その経緯を継続してまとめていきたいと思っています」と、今後の目標を語った。

現代の中国文学を翻訳し日本の読者に伝えていく

飯塚先生のもう一つの研究テーマは、80年代以降の中国文学の翻訳だ。「80年前後、それまで空白状態に近かった中国文学界に新しい作品や作家が一気に登場します。このような時代にめぐり合ったからには、優れた作品を紹介しなければという気持ちで翻訳の仕事の動機づけになります」



それぞれに中国の演劇(右)と現代文学(左)を扱った著訳書。飯塚先生が手がける2大分野だ。

した。

中国の現代文学は作家の年代も幅広く内容も多様化し、雑誌・単行本・インターネットと発表の場も様々ですが、私は日本で言う純文学寄りの作品を翻訳してきました。従来は中国社会全体や長い歴史を描いた小説が多かったのですが、最近の若手の作品は身近な出来事を描いたものが多くなっています」

中国の若い読者層には村上春樹や東野圭吾が人気で、日本の現代小説を自然に受け入れていたのか。日本の社会背景は似通ってきたようだ。「特に都市部では日本と価値観が近くなっているようです。そのような状況を踏まえて、文学的水準が高く話題性もある作品の翻訳に取り組んでいます。最近では、中国でいま最も注目を集める余華(よ・か)の作品を3冊続けて出版しました。ノーベル賞作家の高行健(こう・けん)の作品も手がけています。私は、大河小説的な作品も私小説的な作品もどちらも必要だと思っています。歴史的背景も知ってほしいし、現在の普通の中国人がいかに生活し、何を考えて生きているのかも知ってほしい。それを新たな翻訳を通して伝えられたらと思います」

自分で考えることから生まれる柔軟な思考力

飯塚先生は、3、4年生対象の「演習」の授業で、中国演劇の脚本を日本語と中国語で演じさせている。

「約40人を3つの劇団のように3班に分け、『ラジオドラマぐらいに聴こえるように』と言って読み合わせをしています。日本語訳でまず読み内容を理解してから、プロの俳優の演技を映像で見せて『なるべく近づきましょう』と促しています。中国語のトレーニングになるのはもちろんですが、中国人の生活も分かれますし、演劇という文化に慣れ親しんでもらうのも一つの目的です」

演習では、脚本に影響を与えた西洋の作品との比較など様々なテーマでレポート提出が行われる。そこで「試されるのは『柔軟な思考力』だ。『自分の言いたいことを相手に伝えるように書くのが第一歩。そのためには、クラス内の友人の発言を聞いて自分の考えを整理する訓練も必要になります。他人の考えを100%受け入れるのではなく、共感できる意見や興味のある視点を自分なりに消化する。そこが『勉強』です。柔軟な思考力にとって大切なのは、何より自分で考えることですね。固定概念にしばられず、複眼的な見方をすれば、どんな事象も多角的に理解できるのです。私の研究の原点も『異文化理解』にあります。文化交流の歴史の長い日本と中国は、多くの共通点がある一方、風俗・習慣の違いもあることを忘れてはなりません。文学芸術は、そうした知識を得る上でも大いに役立ちます」

2014年9月取材当時



現在の研究テーマを教えてください

現代中国の演劇と文学です。演劇は20世紀以降、現在に至るまでの日中演劇交流史が主な研究対象です。文学は中国の最新の動向について評論を書いたり、現代の日本に有意義な作品を翻訳紹介しています。

ご趣味は?

テニスです。ひざが痛い、ひざが痛いと言いながら、週に1回以上は楽しんでいます。

どんな高校生でしたか?

高校は神奈川県湘南エリアの江ノ電沿線にあり、海辺という環境のせいか、とにかくのんびりした校風でした。小説を読むことが好きだったので、大学は文学部へ行こうと決めていました。

高校生の頃の夢は?

高校生の頃の夢は?

漠然とですが、報道出版関係か、教育研究方面の仕事ができるようになればいいと思っていました。

お薦めの本を3冊あげてください

- 『おどろきの中国』
橋爪大三郎・大澤真幸・宮台真司
(講談社現代新書)
- 『中国メディアの現場は何を伝えようとしているか』
柴静(平凡社)
- 『ほんとうの中国の話しよう』
余華(河出書房新社)

いずれの本も、いまの中国を理解するためのヒントを与えてくれます。

先生にとっての“特別な一冊”は?

高校時代は月並みですが「太宰ファン」でした。一冊を挙げるなら『女生徒』という短篇集。男性作家が女性言葉を使って、こういう小説が

書けることに驚きました。この本は、いまの翻訳の仕事にも影響していると思います。

高校生へメッセージ

お勧めしたいのは、本をたくさん読むこと、興味をたくさん持つこと、友だちをたくさん作ることです。いずれも将来の皆さんの財産になります。



忙しい合間をぬって続けられているテニス。



最新の中国社会の現実を、鮮やかに描く本。

多彩なアプローチの著訳書が次々に出版される。

